

〔研究ノート〕

# 戦争孤児が被害を語るまで

川 崎 愛

## The Factors that Prevented Japan War Orphans from Telling the Damage

KAWASAKI Ai

The purpose of this study is to examine the literature of Japan war orphans to find out why it took more than half a century for them to confess the damage of war and what led them to do so. The literature review revealed that what enabled Japan war orphans to overcome the fierce suffering recalled by their confession was their determination to become witnesses, so that the lives of their family members, relatives, friends, and other loved ones who died, who had no voice, would not be forgotten. Japan war orphans continued to question the meaning of their survival, and as a result, they realized that the answer was to continue appealing to the society for anti-war.

*Key words:* War orphans (戦争孤児), Group evacuation (集団疎開), Discrimination prejudice (差別偏見)

### I. はじめに

戦争によって子ども時代に保護者を失い孤児になった人の被害は現在も続いている。2020年9月に大阪府高石市の高齢女性が餓死、息子は衰弱して入院したとの報道があった。女性は1941年に長崎県の五島列島で生まれた戦争孤児で母子ともに無戸籍だった。内縁の夫が2016年に亡くなって以降、遺産で生活してきたが2020年夏からはお金が底をつき餓死した。無戸籍なので行政に助けを求められないと思って、夫が亡くなってからは母子でひっそり暮らしていた。息子は当時49歳で教育を受けた経験がなかった。戦後まもなく施行した日本国憲法第二六条「教育を受ける権利及び教育を受けさせる義務」の義務は果たされず、母も息子も権利を行使できなかった。

戦後75年目の餓死は、戦争の被害が75年続いているだけでなく、次世代にまで被害が及んでいる事実を突きつけた。戦争で親を失った子どもが親となり、高齢になっても孤児になった・孤児であったことによる被害が続くのはなぜなのか。戦争の本は数多く出版されていても、戦争孤児のものは近年になって少しずつ刊行されているにすぎない。戦争被害を放置し続ける国の責任はあるにせよ、なぜ、戦争によって親を奪われた子どもたちが半世紀以上も声があげられなかったのか、被害を語るきっかけはどのようなことなのか。自らの孤児としての経験を語るができなかった理由と語るに至った背景を戦争孤児当事者や研究者による著作を中心に検討する。

なお、戦争によって孤児となった子どもは「戦争孤児」とする。再び子どもたちを戦場に送ることのない国であり続けるために創設された「戦争孤児たちの戦後史研究会」では「戦災孤児」ではなく「戦争孤児」と位置づけている。戦災は「戦争による災害」の略語で戦争の人為性をあいまいにしている用語であるのに対して「戦争孤児」は、戦争政策による犠牲者であるという本質を表す用語であ

る（浅井・川満，2020：3-5）からだ。本稿でも戦争によって親を亡くし孤児となった子どもが、戦争政策の補償が皆無のまま放置されたという被害の事実を明確にするために「戦争孤児」を使用する。戦争孤児は、戦災孤児，原爆孤児，引揚孤児，残留孤児，沖縄の戦場孤児，混血（国際）孤児に分類される（本庄，2015：36）。本稿では主に空襲によって家族を亡くした戦災孤児に焦点をあてる。

## Ⅱ．研究背景と目的

### 1. 近年に出版された文献

日本では戦後 70 年となった 2015 年前後から戦争孤児に関する著書が相次いで出版されるようになった。それ以前は戦争孤児の当事者である金田茉莉が苦労して証言を集めて 2002 年に出版した『東京大空襲と戦争孤児』のほかに 1945 年 3 月 10 日の東京大空襲以降の孤児に関する記録は皆無であった（浅井・川満，2020：120）。金田は 1991 年頃から、孤児たちを探して住所の判明した元戦争孤児たち 40 名に、アンケート用紙を送った。そのうち 22 名から回答があり、調査結果は上記の著作で読むことができる（金田，2002：82-90）。

金田は戦争孤児の会の代表をしていて、星野光世は会員であった。星野は学童疎開中以来の 68 年ぶりに、生き抜いた空襲後の日々を色鉛筆で描いた。11 人の戦争孤児の文章に 3 年がかりで描いた絵を載せた（星野，2017：152-157）。清らかで繊細な絵のタッチと孤児たちの壮絶な体験とのギャップが印象的である。子ども時代に起きたことを文章と絵で記録し、次世代の子どもたちに経験を伝承しようとした。

研究者による著書では 2014 年に発刊された『シリーズ戦争孤児』全 5 巻に関わった本庄豊以外に、浅井春夫，川満彰，白井勝彦，藤原伸夫，一ノ瀬俊也，土屋敦，ジャーナリストの中村光博，栗原俊雄らによるものなどが刊行された。これらの文献を用いて孤児の経験や語りの内容を示し、戦争孤児が高齢になるまで体験を語ることができなかった要因と、親を失って以降の不条理を語り始める要因を探ることを目的とする。

### 2. 被害を語る人と要した時間

東京大空襲により戦争孤児となった金田茉莉は 1991 年頃から孤児たちを探し出して、アンケート調査を始めた。体験者が重い口をひらく背景を次のように記す。悲惨な体験をしてきた孤児たちは、少しでも心の傷に触れられると、飛び上がるほど全身が疼きだし夜も眠れなくなる。これまで心の奥底に押し込めて封印してきた「傷」は、死を迎える年代になるにつれて語らなければならないと思うようになった。体験を語らなければ、戦争孤児は忘れ去られ、同じことが繰り返されるという危機感が募った（金田，2002：90-93）。一方で日本が侵略した他国への加害責任は、国に対して戦争孤児の被害追及をする際の障壁となった。日本国内の元軍人だけでなく、国内外、平等の原則で個人への補償と謝罪が必要である（金田，2002：94-98）。

NHK の報道番組ディレクター中村光博は戦争孤児の取材をしようとしても、そもそも孤児であったことを明らかにしておらず取材が難航し、孤児であったことを伝えている人がいても差別を受けたり、嫌な思いをするという理由で断られた、という（中村，2020：80）。

土屋敦は「沈黙の半世紀」「沈黙の七十年」の背後には自らが「戦争孤児」だと語ることによって惹起される、偏見や差別の眼差しの存在を指摘している（土屋，2021：225）。

毎日新聞記者の栗原俊雄は、空襲被害者が高齢になって国に補償と謝罪を求めて提訴した理由を3つあげた。第一に補償実現運動をする余力がなかったことだ。戦後、孤児たちはマイナスからのスタートで生きていくのが精一杯だった。生活の糧を稼いで成人し、結婚、子育てなど普通の人生を歩むのさえ多大な困難を乗り越えなければならなかった。そうした暮らしでの活動への参加は困難である。第二に情報が不足していたことである。同じ戦争被害者でも、元軍人・軍属は補償されて民間人はされないことを知らなかった。第三に「やはり納得できない」という気持ちが起きてきたことだ。高齢になり、人生のゴールを意識するにつれて、不条理を許すことができないという気持ちを強くした者たちが原告として立ち上がった（栗原，2022：112-113）。

戦後数十年を経て、戦争被害を訴える事例は戦争孤児に限らない。

2012年に沖縄戦の被害者79人が、国に賠償と謝罪を求めて那覇地裁に提訴した。弁護士の方針で原告39名が精神科医の診断を受けたところ、37名が沖縄戦の戦場体験に起因するPTSDなどの精神障がいと診断された。戦争被害が続いていることが医学的に証明されたが、2016年に原告敗訴、控訴審でも敗れ、2018年に最高裁で敗訴が確定した。戦争PTSDの特徴の一つは発症の遅い「晩発性」である。精神科医の蟻塚亮二は次のように説明した。「幼い頃のトラウマ記憶が、成人以降の実生活体験の中で隠蔽される。生きていくための仕事や家庭内での役割などに没頭するので、非日常的な戦時体験は隅に追いやられる」。歳を重ねて気力や体力が衰え、社会的な地位や役割、経済力を失い、友人や肉親を失うこともある。喪失のプロセスのなかで過去を振り返ったとき、つらい記憶が侵入する（栗原，2022：200-207）。

戦争PTSDの特徴は晩発性であるという。戦争孤児たちは悲惨な体験を封印することで、心の痛みに加えて偏見差別によって生じる不利益から少しでも逃れようと試み続けて数十年を過ごした。

### 3. 研究の視点と先行研究

戦時中に戦争で親を亡くした子どもは「名誉の遺児」、「靖国の遺児」と呼ばれ、政府の戦意高揚の宣伝手段にされた。しかし敗戦で宣伝価値がなくなると「孤児」「浮浪児」と位置づけが一変した（一ノ瀬，2018：198-200）。

占領期終結後に息子や夫を戦場で亡くした遺族会運動はいちはやく活動を始めた。かつて国や社会が与えていた軍人恩給をはじめとする物質的、遺族の栄誉を称揚する精神的厚遇を取り戻すためである。一ノ瀬は本来、夫や肉親を無意味な戦争で奪われたはずの遺族たちが戦前と戦後を通じ一貫した国家社会の「慈愛のまなざしによる支配」によって馴致され続けたことが運動や戦後日本人の戦争観に影響していると指摘した（一ノ瀬，2019：212, 219）。

第二次世界大戦で民間人が米軍の無差別空襲で被害にあったことを日本政府は認めているが、被害者たちの求める補償には応じていない。1973年から1988年までに、野党による民間人空襲被害者援護法案が14回国会に提出されたがすべて廃案となった。被害者は行政にも政治にも救済を求めたが応じないので、司法による解決を求めた。しかし東京、名古屋、大阪空襲の被害者たちがそれぞれ国に補償を求めて提訴したものの、いずれも最高裁で敗訴が確定した。解決には立法（国会）が必要、というのが司法の判断だった。「三権分立」は民間人空襲被害者たちの救済問題に関する限り、被害者のたらい回しの機構として機能している（栗原，2022：3-5）。

浅井春夫は戦前から戦後の孤児対策は「国家の棄児政策」であったと指摘した。理由は全国戦争孤

児調査の遅れと沖縄外し、民間依存の養護施設、国の児童養護・子どもの権利保障に基づいた孤児対策の不足、孤児の社会的自立に向けての支援制度が確立されなかったこと、である（浅井・川満，2020：29-31）。

刊行された文献からは、孤児は戦意高揚の手段として利用された時期があったものの敗戦後は放置され、戦後まもなく遺族会が補償を求める活動を再開したのとは対照的に、生存のための長い日々を過ごしてきたことが明らかになった。

### Ⅲ．孤児になる

#### 1. 戦争孤児

戦争によって孤児になる要因には、空襲によるものと満州や南方などの外地から引き上げる際に親を失い引き揚げ孤児になるものの二つがあった。戦時中、任意の縁故疎開を推進するという方針が転換されたのは1944年6月に「学童疎開促進要綱」が閣議決定されて以降である。この要綱によって従来の東京のほか、横浜、大阪、神戸、福岡など全国13都市に小学3年生から6年生までの集団による学童疎開が国策として進められた。約40万の子どもたちが都市から農村へと移り住んだ。敗戦の色濃くなった1945年4月には全国17都市の約45万人の学童が7,000か所に集団疎開した。学童疎開は、子どもの安全や生命を守るためというより、将来の兵士や労働力確保を目的とした戦争遂行政策だった（本庄，2016：23-26）。

1948年の厚生省による「全国孤児一斉調査」では、戦争孤児、引揚孤児、棄迷児、一般孤児の4つに分類された。戦災孤児は空襲、原爆で親を亡くした孤児、引揚孤児は旧満州など日本が支配していた地域から引き上げる途中で親を亡くした孤児、棄迷児は空襲などにより親とはぐれたり、捨てられた孤児、一般孤児は上記以外の孤児で、親の病死や行方不明などで生じた孤児をいう。

「全国孤児一斉調査」では、沖縄をのぞく全国の戦争孤児数は12万3,500人で広島県5,975人、兵庫県5,970人、東京都5,330人、京都府4,608人、愛知県4,538人、大阪府4,434人、岐阜県4,365人、埼玉県4,043人、以下福岡県、茨城県が3,677人、3,628人と続く<sup>1</sup>。空襲の少なかった京都<sup>2</sup>に戦争孤児たちがいたのは、駅舎や街が残っていたため、夜露をしのぎ、食べ物の確保が他の地域より容易と思われていたためである（本庄，2015：36-43）。駅は列車で食べ物の買い出しに行った人に物乞いができるという利点があった（本庄，2015：12）。

子どもたちはグループで助け合って生活していた。孤児たちは虱を持っていた。虱は人間が亡くなると体温が下がると一斉に他の子へ移っていく。一緒に寝ていたときに自分のところに虱がたくさんきたら、隣の仲間が亡くなったことが分かった、との証言もある（本庄，2015：19）。

1934年生まれの渡辺喜太郎は東京・深川の小学校から新潟県の北部にある寺へ30人のクラスメートと疎開した。1944年8月のことで渡辺は5年生だった。最初こそは旅行気分だったが、すぐに親元を離れた生活、甘えを許さない教員の軍隊式指導に、帰京の念は募る一方だった。翌年3月10日の東京大空襲で両親と3人の妹が犠牲になった。空襲から一週間後には、心配した親たちが迎えに来たが、渡辺の親は待っても待っても一向に現れず両親への不安が強まったころ、迎えにきた友だちの母から両親は空襲で亡くなったことを知らされた。親の迎えがなく新潟各地の疎開先に残った生徒は徐々に近い場所に集められ、最後まで残った生徒は330人疎開した中で、6人だった。渡辺は迎えに来た親戚に連れられて栃木県の機織り会社の社長の家に行き、その日から住み込み奉公をすることに



なった。つらかったのは食べ物で、家の子どもは上座、渡辺は奉公人だから茶碗一杯だけのご飯を土間で食べた。さらに問題だったのは、どんなにつらくても、帰るところがないことだった（中村、2020：70-85）。

13歳で孤児となった小倉勇は近所の親戚の家に身を寄せることになった。どの家も経済的に逼迫するなか親をなくした子どもへの対応は冷たかった。「いままでは仲良く遊んでいたのに、親が突然死んでしまって寂しくてしょうがないなかで、自分だけ朝早く起きて、ご飯炊やら洗濯やらをして、子守までしなければならない。その上、邪魔者扱いまでされる。そんなの耐えられますか。僕は、戦争孤児の中でも一番泣いていたのは、親戚の家に預けられた子どもたちだったと思うよ」としている（中村、2020：106-109）。

9歳で戦争孤児となった永田郁子はきょうだいと離されて、母の実家にひきとられた。物がなくなるたびに祖父から無実の罪を着せられ責められた。みんなで食事をしているとき、自分だけ「おかわり」は許されなかった。「居候に2杯食わすな」と祖父が怒るので、空腹のため食べ物が落ちていないか、いつも下ばかり見て歩いた。母の実家もほかの親戚からも「親のない子のめんどろをみるのはいやだ」とあしらわれ、親のいないみじめさを思い知らされた。以後、すべての親戚と交際を絶つことを決意した（星野、2017：52-65）。

『シリーズ・戦争孤児』を編集した本庄豊は、親戚は「親しいからこそ余計に傷を受ける。無関係な人に差別をされてもそうは思わないけれど、戦争が終わるまではおじちゃん、おばちゃんだった人が戦後は鬼のようになっていくという、それが戦争の辛さ」と話した（本庄、2015：18）。

外地からの引き上げ孤児を受け入れる施設が全国につくられ、「こどものうち上野寮」は合計66人の引き上げ孤児を受け入れた。引き上げ時に3-4歳だった瀬川陽子は満州にソ連の侵攻後、母と弟とともに必死で逃げた記憶がある。男の子は引き取り手が現れやすいということで弟は「置き去り」、母は収容所で亡くなった。ソ連軍が迫るなか厳寒の外に取り残された瀬川はひどい凍傷で立てなくなった。雪の上にいた瀬川を通りかかった医師らが発見し、なんとか引揚船に乗せられ日本に帰った。引揚げ孤児の施設や凍傷の治療のための障害者施設で育った瀬川は凍傷の後遺症だけでなく、自分の本当の名前さえ分からないルーツ不明の苦しみが続いている、という（中村、2020：88-97）。

## 2. 戦争孤児の対策

敗戦直後の1945年9月に政府は「戦災孤児等集団合宿教育所の設置に関する」文部省次官通牒を出した。この通知に基づいて、戦災被害の大きい9都市に戦災孤児等集団合宿教育所が開設され、1946年度の収容児童は2,500名、同年10月から外地引揚児童等集団教育所も設置された。1948年度には両方合わせて16都道府県40か所、収容児童は4,500名となった（白井・藤原、2020：31-33）。

1948年児童福祉法の施行にともない、所管は文部省から厚生省へ移管され児童養護施設（当時は養護施設）となった。孤児の里親委託は戦前から行われていたが、施設の財政的負担の軽減が主な目的だった。児童福祉法施行の前は里親としての適格性を判断する専門機関、その後の支援体制もなく、施設長の判断に委ねられていた。敗戦直後の混乱期に戦争孤児等は里子や養子に出されていた（白井・藤原、2020：67-75）。その子どもたちがどのような人生を歩んだのかは語られていない。

国の戦争孤児政策は極めて限定的で、多くの子どもたちは浮浪するしかなく、取り締まりの対象とされた。

## IV. 戦後を生きる

### 1. スティグマ体験

戦争孤児たちが親戚の家や施設を抜け出し路上でその日暮らしをしていることは、復興が進むにつれて社会から問題視されるようになった。中村によると当時の新聞の見出しでは「落ち込む先は“悪の道”」（『毎日新聞』昭和21年7月16日）、「飲む・喫う・盗む 末恐ろし浮浪児」（『毎日新聞』昭和22年9月14日）など路上で暮らす子どもたちが、治安を乱す存在として捉えられていた。戦争孤児だけでなく、家出した不良少年らも加わり、路上にしか居場所のない子どもたちに対する社会の目は無関心から嫌悪へと変わった。こうした社会の目に子どもたちは傷つき、さらに孤立を深めていった（中村、2020：182-185）。

神戸の空襲で両親を亡くした山田清一郎は、常に餓死と隣り合わせの空腹をかかえ、シラミさえ寄りつかない汚れて固くなった服を着た孤児たちに社会は冷たかったという。「駅の待合室に私たちが入っていると出ていけと追っ払われる。蹴飛ばされる。（略）店でなにか拾ってこようとすると水をかけられたり、野良犬のように棒を持って店の人に追いかけられる。」なぜ浮浪児になったのか知っているはずなのに（中村、2020：186-189）。生きていくには盗むしかなく、仲間のアキラは店からトマトを盗んで逃げた。店員に追いかけられ、闇市通りから広い道路に出たとき、減速せず走ってきたジープにはねられた。アキラは即死、ジープからアメリカ兵と若い日本人女性がシートを取り出し、アキラを包んで車に乗せ、そのまま走り去った。道路にはアキラの大量の血のなかでつぶれたトマトが転がり、まるでアキラの「心臓の鼓動」のようだった。今でもトマトは食べられない（星野、2017：83-84）、と記した。ある日、山田は駅で狩り込みにあい、長野県にある児童保護施設に送られた。大都会に比べると田舎町は退屈に感じたが、村の子どもたちが学校に通っている様子を目にすると、自分もまた学校に通って勉強してみたい、みんなと遊びたいと思うようになった。しかし、施設の子どもたちが地元の小学校に通うことに地元住民からは反対の声が高まり、すぐに通うことができずにいた。施設の食糧事情が悪かったため、子どもたちが畑から作物を盗んで食べたり、民家から食料を盗むなど、施設の孤児の悪評が広まっていたからである。施設職員と村の担当部署の交渉の結果、1948年6月13日に山田は3年ぶりに学校へ通うことになった。久しぶりの学校に胸を躍らせて行ったが、孤児たちは倉庫のような部屋に集められた。その部屋の黒板には犬小屋、浮浪児、ばい菌などと書かれていた。腹立たしかったのは、落書きを消さない教師で、教師はなにか不都合があるとまず孤児を疑った。生徒からも教師からもいじめを受けた。「なかなか通えないでいた学校にせっかく通えるようになったんだから、一度開いた門は、絶対自分たちからは閉じない。ここで行かなかったら、それ見たことかって思われてしまうのが一番悔しいことだったよね。だからなんとしてでも、泣いても、けんかに負けても、学校にだけは絶対行くっていうね、そういう思いは、俺は常に施設の仲間に言ってたね」。山田は理不尽な扱いへの悔しさをバネに勉強を重ね、23歳のときに夜間大学に進学した。昼間にアルバイトをかけもちして勉強し、27歳で埼玉県で中学校の教師となり、定年まで働いた（中村、2020：190-194）。戦争に両親を奪われ、たったひとりになった10歳から、27歳で教師になるまでの17年間、「生きていてよかった」と思えた日は一日もなかった。何より辛かったのは、自分には「帰る故郷がない、支えてくれる家族がいない、たったひとり」という孤独感だった（星野、2017：96-103）。

1945年6月の神戸空襲で孤児となった内藤博一は、しばらく駅で暮らし何度も声をかけてきた男性（川村秀蔵園長）に伴われて児童養護施設「信愛学園」へ行った。飢えの苦しみからは脱したが、学校に行くと「戦争こじき」とバカにされた。それを聞いていた教師も止めなかった。施設では野球に夢中になり、苦労を何もかも忘れられると練習に打ち込んだ。高校卒業後、プロ選手への道が見えたが肩を痛めて契約は打ち切られた。人のため、地元神戸市のために働きたいと考えるようになったが、孤児であることを理由に選考の対象外とされる噂があった。内藤は神戸市の幹部に手紙で問い合わせ、熱意をアピールした結果、24歳のときに神戸市職員として採用された。交通局に配属され、市営バスの運転手として定年まで働いた（中村、2020：24-40；白井・藤原、2020：102-114）。

終戦まであとわずかだった1945年8月に近所の軍用機練習用滑走路が攻撃され、弟妹とともに孤児となった金子トミは上野の地下道で3か月過ごした経験をもつ。このままでは野垂れ死ぬと、幼いきょうだいの預け先を見つけ、自分は神戸で住み込みの女中として働いた。職場の人の紹介で23歳のときに結婚し、二人の子どもにも恵まれ、夫とは45年間連れ添った。しかし、終戦直後に上野駅の地下道で過ごした経験は夫に最後まで打ち明けられなかった。辛苦の体験を思い出す以上に「こんな女をもらったのかと思われるのがつらくて」と手で口を覆いながら告白した（中村、2020：43-56）。

11歳で戦争孤児となった星野光世は、夫の郷里の新潟で簡素な結婚式を挙げたとき、夫側の親戚が「あの嫁さん、どこの馬の骨や……」とささやいていたと聞いた。誰が好き好んで孤児になったのか。蔑まれるべきは、残された子どもではなく、親を奪った「あの戦争」だ、と怒りと悔しさを噛みしめた（星野、2017：48）。

スティグマ体験は不信の念を膨張させ、圧倒的な孤独をもたらした。親や家族から愛された記憶を含めて過去はすべて沈黙するしかなかった。

## 2. 語ることと組織化

台東区の小学校から宮城県の旅館に学童疎開中に孤児となった金田茉莉は、現在も疎開孤児の調査をしている。きっかけは、疎開孤児学寮だった大泉寺住職から、引き取り手のない孤児は校長が働き手を希望する大人に「くれてやった」、「男児は頑強な子から、女児は器量のよい子から先に貰われていった」と聞いたことだった。住職は貰われた子どもたちが学校へも行かせてもらえず、酷使されていたのを熟知していた。敗戦後の戦争孤児が施設の財政的負担軽減のために的確な判断なしに引き取られていた事実を裏付ける証言である。金田はこの話に愕然として、疎開孤児のその後の調査を始めた。しかし、1944年6月に発表された第一次疎開の資料や記録はあっても、1945年3月10日の東京大空襲、4月以降の「根こそぎ疎開」といわれる第二次疎開の記録は皆無だった。金田が多数の孤児たちや関係者の証言を聴き取り、資料の調査を行って、ようやく戦争末期の「根こそぎ」集団疎開の実態が明らかになってきた。空襲や孤児に関する公文書が一枚もないことに元教員は「敗戦直後に孤児や空襲の資料は全部燃やした。若輩者は上からの指示に従うしかない」と述べた。文部省・東京教育局は、校長や教頭らに集団疎開について箝口令を敷いた。集団疎開の証拠隠滅は国策としてなされ、疎開孤児の大半は歴史から抹消され、生きるための支援は一切ないまま、悲惨な道をたどった（浅井・川満、2020：116-126）。金田は良香織の聴き取りに「男はヤクザになって、女は売春婦になったんだってね」、「社会を騒がす悪いやつらだったって」と孤児へのスティグマを語った。このスティグマが語る言葉を奪ってきた。戦争犠牲者の補償や援助、支え合いを目的とした会合などで語る機会があった



ときに自らの体験を受け止めてもらおうと「理屈じゃなく浄化」され、語りが促されることもある。(浅井・川満, 2020: 80-83)。

戦争孤児となって親戚の家を飛び出し2年以上の路上生活の間に両目の視力をほとんど失った小倉勇は、26歳のときから60年マッサージ師として京都で生計をたてている。2015年夏にNHKディレクターに誰にも言わなかった過去を話すと連絡をした小倉はその理由を次のように話した。集団的自衛権が含まれる安保法制の強行採決への危機感、背景には戦争を経験していない国民が80%にもなっている現実に対して、戦争の悲しみ、大変さを伝えないといけないと思った。「戦争のせいで親を亡くして孤児になって、(略)路上生活のなかでね、何を考えて、何がほしかったのかということね、やっぱり知ってもらえないといけないなと思ったんですよ」(中村, 2020: 98-106)。戦争孤児を怖い、汚い存在だと見て近づいてもこない大人たちに対しての小倉の不信感は「これから社会に一生たてについて生きていこう」と覚悟を決めるほどだった。小倉は番組での証言をきっかけに学校やイベントで講演する機会を持つようになった。講演の最後には戦争孤児たちが終戦後も苦しんでいること、いまこの瞬間にも、苦しんでいる子どもたちが各地にいることに大人たちは目を向けてほしい、そして声をかけるだけでもいいから関わってほしい、と伝えている(中村, 2020: 246-253)。

上野の地下道での暮らしの記憶を自分の中だけに封印して生きてきた金子トミは、80歳を過ぎてから、近所のATM店舗を清掃するアルバイトを週3日午前中に行っている。アルバイトの目的は、東京大空襲の被害者への謝罪と国の補償を求める活動への寄付のためである。毎年一回の総会に出席して、主催者からの依頼で自分の経験を話したこともある。戦争が終わっても人知れず路上で死んでいった子どもたちがいた事実を絶対に忘れさせてはならない、と活動を支えるために定期的に寄付をしている(中村, 2020: 56-59)。

## V. ま と め

戦争によって孤児になると庇護だけでなく故郷も失い、圧倒的な孤独の底に突き落とされる。戦争孤児は集団疎開によって小学生の年齢だった自分だけが生き残ることが多かった。

戦後、孤児は親戚から邪険にされ、社会からは治安を乱す存在だと差別され、理不尽な扱いを受けて語る言葉を失っていく。孤児となってスタートした戦後の暮らしは、生より死が常に近くにあるほど過酷であった。敗戦後の日本は、政策の犠牲者である戦争孤児を放置した。路上で亡くなった子どもや教育を受けられずに酷使されて亡くなった子どもは数知れない。戦争によるPTSDは晩発性であるという。ごく幼い頃に引揚げ孤児になるとまったくルーツをたどることができない困難もある。

占領期終結後に息子や夫を戦場で亡くした遺族会は「恩恵」と実質的な補償を取り戻すために活動を始め、軍人恩給を受給してきた。戦意高揚に利用された「名誉の遺児」は敗戦後には無き者とされた。

戦争孤児たちは、国家の「慈愛のまなざしによる支配」からは自由であったが、人生の分岐点に差し掛かるたびに差別偏見にさらされ、毎日生き延びるのに追われて、恩給の存在すら知らなかった。現役時代を終え、子どもの独立、配偶者が亡くなるなど半世紀を経て、過去と向き合う時間を持った。孤児になって以降の不条理の連続の原因は戦争であるとの確信はゆらぐことがない。半世紀、70年、死ぬまで沈黙を強いるほどの「社会を騒がす悪いやつ」というスティグマを超えて、語らなければならないという信念は、すべての戦争孤児たちの命の重さである。



誰にも理解されない経験、言葉にすることができない、異質な存在でいたくない、語ることで呼び起こされる悲しみ、親しい人を助けられなかった自責の念、絶望、怒りなどさまざまな感情をどう乗り越えるのか。声を上げるきっかけは、戦争を阻止するために歴史の証言者になると決めたときである。自分が生きている意味を考えたとき、親やきょうだい、友人をはじめとする語ることのできない大切な人たちのために語る責任があると考えて、心身を削るように経験を語った。自らの経験の語りを受けとめられる体験を繰り返して、やがて組織を結成した。戦争孤児が忘れられ、同じ過ちを繰り返さないように国を相手にした裁判の原告になった。今を生きる人々が、計り知れない犠牲を払った証言を聴くことのできる時間の余裕はあまり残されてはいない。

#### 注

- 1 「全国孤児一斉調査」は1945年3月10日の東京大空襲で多くの孤児が発生したときから2年9か月も経た後の調査で、孤児のかかなりの人数が、すでに社会のなかに“吸収”されてしまっていた。孤児の人数はこの数字しかないが、これでは戦争孤児の実相をつかめない（浅井・川満，2020：20）。
- 2 京都の空襲被害が少なかったのは、米軍が原爆投下目標の一つとしていたからである。1945年7月末まで京都は原爆投下第一目標だった。米軍は核兵器の「効果」をはかるために、投下目標とした京都に対して通常兵器の使用を控えていた。もし京都に投下されていたら、爆心地とされる国鉄梅田車庫の近くの京都駅は跡形もなくなっていただろう（本庄，2016：18）。

#### 文 献

- ・浅井春夫、川満彰編（2020）『戦争孤児たちの戦後史1 総論編』吉川弘文館
- ・本庄豊編（2014）『「シリーズ戦争孤児」①戦災孤児一駅の子たちの戦後史』汐文社
- ・本庄豊（2015）『戦争孤児を知っていますか？あの日，“駅の子”の戦いが始まった』日本機関紙出版センター
- ・本庄豊（2016）『戦争孤児―「駅の子」たちの思い』新日本出版社
- ・星野光世（2017）『もしも魔法が使えたら 戦争孤児11人の記憶』講談社
- ・一ノ瀬俊也（2018）『昭和戦争史講義 ジブリ作品から歴史を学ぶ』人文書院
- ・一ノ瀬俊也（2019）『銃後の社会史 戦死者と遺族』吉川弘文館
- ・金田茉莉（2002）『東京大空襲と戦争孤児 隠蔽された真実を追って』影書房
- ・栗原俊雄（2022）『東京大空襲の戦後史』岩波書店
- ・中村光博（2020）『「駅の子」の闘い 戦争孤児たちの埋もれてきた戦後史』幻冬舎新書
- ・白井勝彦、藤原伸夫共著（2020）『神戸の戦争孤児たち』みるめ書房
- ・土屋敦（2021）『「戦争孤児」を生きる ライフストーリー／沈黙／語りの歴史社会学』青弓社

（かわさき あい 福祉社会学科）